

Title	書評：松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本栄莉編 『アフリカで学ぶ文化人類学：民族誌がひらく世界』昭和堂、2019年
Sub Title	
Author	板久, 梓織(Itaku, Shiori)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2020
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.25 (2020. 11) ,p.106- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20201120-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

松本尚之・佐川徹・石田慎一郎・大石高典・橋本栄莉編 『アフリカで学ぶ文化人類学——
民族誌がひらく世界』

昭和堂、2019 年

板久 梓織

本書は、アフリカの各地で現地調査を行う研究者たちによって執筆された、文化人類学とは何かを学ぶための本であり、「読者の皆さまへ」によれば、文化人類学やアフリカ研究に関する学部の授業で用いられる教科書を想定してつくられたものである [i 頁]。

本書の構成は序章と 11 章から成る。トピックは環境や経済、都市、親族、法、民族、神話、歴史、呪術、難民、開発と多岐にわたる。ただし、二、三章ずつそれぞれ「暮らしの手立て」「人の秩序のありよう」「世界をまなざす方法」「課題」や「問題」とされることが多いもの」とまとまりをもたせている。序章の表の一覧において、各章で取り上げる民族誌と主な対象、考えるテーマ、問いがまとめられているのも、学習に用いるためのものとしてわかりやすくなっている。

本書の特徴は、各章において、前半では古典的な民族誌を取り上げて、その内容を紹介し、後半部分では執筆者自身の研究を通して、トピックと関わるアフリカの現在を提示するスタイルを基本としている点にある。本書では古典を取り上げる理由を、それぞれの章で展開する記述内容について一定の質を担保できると考えたためであること、またアフリカの人々の生の多様性に触れ、アフリカ諸社会に対する関心を育ててほしいためであると述べる [i-ii 頁]。

本書は、対象地域をアフリカという枠組みに設定し、人類学で長らく研究がなされてきた、そして今もどのような民族誌においても基本情報として記述されるような「環境と生業」(第 1 章)や「経済と社会」(第 2 章)、「親族と結婚」(第 4 章)から、比較的最近問題化されている「開発と支援」(第 11 章)まで網羅しているのも特徴である。このことは取り上げる古典とされる民族誌の発表年代を見ても明らかである。例えば「難民と日常性」(第 10 章)や「開発と支援」(第 11 章)で取り上げられた民族誌は、90 年代に発表されたものであり、他の章の民族誌と比べると近年のものであり、このことから、難民や開発がこの時期に注目されるようになったことがわかる。

さらに、いずれの章も、古典から執筆者による事例までを取り上げることで、現在までの研究の展開を把握できるものとなっている。これに加えて、各章以外のテーマに関しては、コラムという形で言及もなされている。

章の構成に関して、基本的に一冊の古典を取り上げる点では全ての章に共通している。多くの章ではその後、執筆者による事例紹介へと続くが、中には例えば「呪術と科学」(第 9 章)の

ように、執筆者の事例ではなく長島信弘が名付けた災因論とその民族誌を、当時の研究背景と近年の論考に触れつつ、分析し評価するものもある。また、執筆者による事例紹介がなされている章においても、執筆者がフィールドで得たデータを提示したものや、フィールドでの実際の体験を描いたものなど、後半部分は執筆者の個性が表れている。例えば「法と政治」(第5章)では石田は事例を端的に記述し、人が人を裁くことについての困難さについて、ケニアの3社会を類型化して示し、取り上げたグラックマンの民族誌の意義を指摘する。そのほか、「民族と国家」(第6章)では佐川は自身の調査事例を記し、アフリカにおける帰属意識の特徴を示しているし、「神話と宗教」(第7章)では橋本は、ハイブリッドな時空間や信仰を生きる現代ヌエルの事例を提示しつつ、グリオール作品が有する視点を評価する。これらは執筆者自身が得た事例を紹介するものである。その一方で、「歴史と同時代性」(第8章)のように民族誌や事例を挙げつつ、執筆者自身の読書経験を交えながら口頭伝承研究の魅力を示して読者を誘わんとするものや、「開発と支援」(第11章)のように、事例紹介にとどまらず、執筆者のこれまでの実践と研究の歩みが経験談の形で描かれているものなど、執筆者自身が記述に登場するものもある。その他、「都市と移民」(第3章)のようにアフリカ内部の移動だけでなく、日本におけるアフリカ系移民について触れているものもある。このようにある程度構成は同じでも、各章は執筆者によって異なるカラーが出ている。いずれの章においても、現役のフィールドワーカーによる事例はみずみずしく、アフリカの現在を知る点でも有用であろう。

以上、章の構成について触れたが、序章では、本書の多くの章において共通して2つの試みがあると述べる。それは第一に異文化としてのアフリカ像を再考し、私たちとの関係性を問い直す作業、いふなればアフリカを「再発見」する試みと、第二に、私たち自身を問い直す作業である(12頁)。なるほど第一の試みは本書を読めば成功しているといえよう。しかし第二についてはいささか疑問が残る。というのも、私たち自身を問い直す作業というのは、読者が自己内省をすることで初めて可能となるもので、ただ単に読むだけではそれは果たされたことにならないからだ。中には「都市と移民」(第3章)や「神話と宗教」(第7章)のように自分たち自身を見つめることを促すヒントがある章もみられる。しかし、もし第二の試みをより明確な形で提示するのであれば、各章のおわりに、コラムよりもさらに短いコーナーを設けて、読者自身の事柄に結びつくような身近なケースを示すほうがより教科書としては親切かもしれない。当然どこまで手厚くするかは編者の意思によるものである。しかし、「アフリカで学ぶ文化人類学」というタイトルや、各章で取り上げる民族誌や問いなど丁寧に一覧でまとめている点から、初めて人類学を学ばんとする学生向けであるように推察される一方で、ある程度基礎的な教科書を学んだ上での内容であることに鑑みると、どのような授業で使用するのが想定しているのか、具体的に人類学の基礎的な授業なのか、より専門的な授業なのかを判別しにくかったところもある。

このことには、空間的に隔たった「他者」を題材とすることに関して川口が提唱した「なぜヌアアか問題」(川口 2018; 290)とそれに返答する梅屋(2019)の一連の議論が関係してくる

ように思われる。川口が教科書という紙幅の制限があるなかで、想定される読者にとって空間的にも時間的にも遠い「他者」を取り上げることの難しさを指摘するのに対して、梅屋は読者（あるいは執筆者）の身近なものばかりを扱うことは古典を軽視することにつながりかねないと述べる。両者の議論は、人類学を学ぼうとする学生に向けた一般的な教科書でなされたものであり、その点ではタイトルにアフリカとある本書とは異なっている。また、教える側がアフリカに精通しているかどうかという点も本書を扱う際に大きく関わってくるだろう。しかし、本書が文化人類学の学部の授業で用いられることを想定したものである以上、同様の問題意識は共有できると考える。

例えば「民族と国民」(第 6 章) で取り上げた『ダトーガ民族誌』を著した富川の述べる多部族的共生社会は、人の移動が盛んになり、異なるエスニック・アイデンティティを持った人々が共存する社会を模索する現在において、示唆に富むものである。読者にとって心的な距離があるとしても、「アフリカの人々が培ってきた柔軟な関係性と付加型のアイデンティティから学べることは多いはずである」(144 頁)。そして、遠く離れた人びととの何かしらの共通項を見つけたとき、読者の新たな世界が開かれるのではないだろうか。

また本書を読むと、古典の意義を改めて確認できる。「親族と結婚」(第 4 章) で取り上げた、ヌアー (ヌエル) にとってのウシとは何かを学ぶことは、家族とは何か改めて問い、人々が紡ぐ諸関係について考えるために必要なのである。このことは、エヴァンズ=プリチャードの三部作がアフリカを調査対象としているかどうかに関わらず、人類学を学ぶ全ての者にとっての古典であることから明らかである。現代的問題を考える上でも、古典から現代までの研究展開を知る上で古典に触れることは不可欠であり、古典で明らかとなったことが、現代を生きる私たちにとって参考になることが往々にしてある。私たちは古典から学ぶことが依然としてある。さらに、古典を取り上げた執筆者自身も同様の研究を行っている場合があり、古典から現在へと研究が続いていることを学べるのも、本書の特徴である。

本書では、序章において、アフリカの中毒性についても触れられており (8-9 頁)、アフリカの魅力を訴えてもいる。なぜ、(私たち) 人類学者はアフリカに何度も足を踏み入れたくなるのか——本書ではその問いに「アフリカが、新たな他者 (新たな自己理解を促すような、自分によって真に意味のある他者) に出会う場としての可能性をもっているからではないだろうか」(9 頁) と投げかける。続けてアフリカは、人間の人間への想像力の限界を試されるフィールドの 1 つであり続け、人間理解のための確かな手がかりでもあると述べる (9 頁)。このことが事実であるかどうかは、アフリカに足を運んだ人にもみ明らかされるだろう。その意味においても、本書はこれからアフリカに魅了されるであろう人々のよい案内書である。また、繰り返しになるが本書で取り上げられる民族誌は人類学の古典でもある。調査地域がアフリカであることを問わず、本書で取り上げたテーマに関連することを学ぶ人は、人類普遍の事象を考察することが人類学の役目であることに鑑みても、一読すべきである。

さらに、本書からは自分とは異なる他者の世界のありかたの一例を覗き見ることができる。

このことは、本書の副題「民族誌がひらく世界」からも示唆されている。人類学に関心がある人、自分のフィールドを決めかねている人にも本書はお勧めである。

【文献】

梅屋潔, 2019, 「書評 川口幸大著 『ようこそ文化人類学へ——異文化をフィールドワークする君たちに』 京都、昭和堂、2017年」『文化人類学』84(3): 349-352, 日本文化人類学会.

川口幸大, 2018, 「書評 梅屋潔、シンジルト編 『新版 文化人類学のレッスン——フィールドからの出発』 東京、学陽書房、2017年」『文化人類学』83(2): 288-291, 日本文化人類学会.

(いたく しおり 東京都立大学大学院人文科学研究科)